



＊オフィスを癒してくれるセラピー犬のルイ君

●社会で役立てる人間になりたかった

在学中を「まじめな学生ではなかった」と振り返るが、法学部の単位だけでなく経済・経営の授業も積極的に受けていた。「早く社会に出て、役に立てる人間になりたかった。だから、実学重視の阪大が私には合っていたんでしょね」。卒業直前の1983年2月にはヨーロッパを40日以上放浪し、ゼミの川島慶雄教授(国際法)が「卒業生総代に決まったよ。式に出られるだろうな」と心配したエピソードも披露。

●MBAを取得しマッキンゼーの役員まで

日本生命に就職したものの、男女雇用機会均等法成立前で、女性には「コピー、お茶くみ」のイメージがついていた。試験を受けて女性総合職第1号となったが、知人の勧めなどもあって、米国のハーバードビジネススクールで学び直した。授業前に1日3ケースの事例を学んでおかねばならず、自習だけで「3時間×3」。寝る時間もない日々。父の仕事の関係で小中学校を米国で過ごし、阪大でもESSで語学力は鍛えられていたが、ハーバードの授業は厳しかった。ケースディスカッション重視で、当てられるたびに自身の意見をスピーチする積極性が求められた。

MBA取得後、28歳でマッキンゼー・アンド・カンパニー(米国、日本)に入社。実力と個性を発揮して、パートナー(役員)に抜擢された。「私は、課題の設定、チーム運営、クライアントへの対応が得意で、やる気をもって楽しく仕事できる環境を作れたのが評価されたのですね」



▲マッキンゼー時代の大石さん(最前列左端) アジア・オセアニア地区の支社マネージャーが集った会議(1991)

●出産が転機に。「病院を良くしたい」

36歳で長男を出産したことが、大きな転機となる。病院で、特別悪い扱いを受けたわけではなかったけれど、病院のあり方に疑問をもった。例えば、診察までの長い待ち時間。銀行なら、時間のかかる融資交渉とすぐに済む預金引き下ろしは別のルートで行い、待ち時間を削減しているが、病院ではいろんな症状の患者さんが同じルートに乗せられている。それが「当たり前」とされていた。



▲別荘がある葉山で長男アキ君と(2002)

医療界に新風を吹き込もう。マッキンゼーにいた医師と一緒に2000年、「メディヴァ」を興し、第1号クライアントとして買収アーバンクリニックを設立した。以来、かかわった医療施設は120〜130にものぼるほか、病院の再生、健保組合の赤字解消、マンマでの医療支援など幅広い活動を展開する。患者さんの視点を重視し、診察時間を午前8時〜午後8時に設定したり、カルテの開示を行ったり。「同じ5分間診察するにしても、パソコンばかり見ているのではなく、患者さんの目を見て触診することで、患者さんは満足できる。最後に「ほかにご質問はありますか」と医師が尋ねることによって患者さんの満足度が上がります」と説明する。医療報酬には複雑な点数制度があるが、いろんな診療料をうまく乗り入れることで、経営効率も上がる。患者さんに認知してもらえれば、口コミで「いい診療所だ」と広がるのだ。

●安心して出産・育児のできる職場に

メディヴァ内では、出産・育児を経ながら働ける環境を整備している。子どもが熱を出しても、自宅にパソコン1台あれば看病しながら仕事をこなせる。仕事のチームでも融通し合う。職場に子どもを連れてきても構わない。大石さんは、社会、職場に昔ながらの「お互いさ

ま文化」を再生させようとしているのだ。家族会を作って親睦を図るほか、顧客との懇親会を催せる「宴会スペース」の隣には、子どもが遊んで待っていられる空間も。約100人いる男女社員には、月1人くらいのペースで子どもが生まれている。そして若い人も「子どもがほしいな」と考えるようになってきているという。

社員には、ワークライフバランスの取れた仕事を求める。原則として深夜までとか徹夜の勤務は禁じ、効率よく働くよう指導する。1週間1人で考えるより、1日考えてから周囲に相談する方がいいと話す。

●企業には「NPO的」な体質も

企業である以上、利益追求は大事だが、それに固執せず、「NPO的」な体質を大切に考える。「子どもから『どうして働かないといけないの?』と尋ねられて、『お金を稼ぐため』だけなんて応えたくない。『君たちに、住みやすい社会を作っていくためだよ』と言える大人でいたいんです」

●「自分の力をどれだけ磨くか」

阪大の後輩たちには「同じ人生を歩むなら、やりたいことをやってみなさい。これをやっちゃいけない、こんな格好悪い、なんていう考えは捨てて、自分のエネルギーをいっぱい発揮したらいいんです」と呼び掛ける。「マッキンゼーなどにいた阪大出身者も、一生

懸命取り組む姿勢を持っていました。マッキンゼーでは、仕事を回す能力に長けた人間を「street smart」と表現します。阪大出身者にはこういう方が多い気がしますね」とも。また自身の経験も語ってくれた。

転職などの転機が訪れた時、どう判断するか―「あっちの水が甘く思っても、それに惑わされないように。今の組織だからやれている場合もある。自分の力を過信せずに、よく見詰め直してから道を決めてください」

日本の社会はまだ、女性が実力を発揮しづらい―「女性は損だ、なんて考えても仕方ない。レアであるからこそそのメリットがあることも。得意な分野、才能をどんどん伸ばしたらいいんです」

箕面に実家がある、「大阪人」を自認。「物怖じしない積極性がとても大事で、大阪人のDNAは世界に通用しますよ」と笑いながら、「最後は、自分の力をどれだけ磨いてきたかで」と力強く結んだ。

企業情報
<p>■株式会社メディヴァ MEDIVA=Medical Innovation and Value-Added. 本社は東京都世田谷区用賀2. 資本金1億5800万円。事業内容は、医療機関・介護事業の経営コンサルティングとオペレーター、健保・人事のコンサルティング、ヘルスケアサービスの開発・運営など。社員は、医療やコンサルタントとは無関係だった職種から転職してきた者が多く、率直でユニークな意見が交わされている。</p> <p>今年から新卒社員の募集も開始している。 Eメール=contact@mediva.co.jp</p>

子どもたちには「君たちに、住みやすい社会を作っていく」と言える大人でいたいんです



●大石佳能子(おおいしかのこ)氏
1983年、大阪大学法学部卒業。日本生命を経てハーバードビジネススクールでMBAを取得。88年マッキンゼー・アンド・カンパニーに入社。パートナーにも就任。退職後、2000年に株式会社メディヴァを設立。代表取締役社長を務める。06年「日経ウーマン・オブ・ザ・イヤー」受賞。

医療界を患者視点で革新、価値創造

「お互いさま文化」で働きやすい環境も

- OG訪問
- 医療コンサルタント 株式会社メディヴァ代表取締役社長 大石佳能子— Kanako Oishi

「患者さんの視点に立って医療界に革新と価値創造をもたらしたい」と、2000年に株式会社メディヴァを設立した代表取締役社長の大石佳能子さん。米国で取得したMBA、マッキンゼーなどのキャリアを生かし、医療機関・介護事業の経営コンサルティング、オペレーターを全国で展開している。両親が大阪大学法学部の同級生、自身も法学部の卒業生。阪大法学部の「申し子」のような女性だ。実業界で活躍し政府の公職も務める一方、社員たちには「お互いさま文化」の中で家族を大切にすることを奨励し、子育てなど働きやすい環境を整えている。